

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月18日(金)
その2

◇ 登校時の持ち物 検討中 その①

大柳地区から登校してくる1年生のOさん。

校内では大変元気がよいが、登校時はその元気が感じられない。毎朝の光景だ。4 km弱の通学。しかも下りが多いとはいえ坂道だ。下りは日常とは異なる部分の筋肉を使う。滑りやすい条件もあり、力の入れ具合を加減する必要もある。登校時にOさんの元気が出ないのは、通学するだけで疲れてしまうのである。

通学距離だけではない。ランドセルをはじめとする荷物の重さが負担に輪をかける。加えて、コロナ予防のマスクが呼吸を妨げる。三重苦である。

一方、米河内地区の児童の通学路は、上り坂が続く。しかも結構な勾配だ。

猛暑の夏季は、正門から玄関に続く桜階段の途中で休憩をする児童の姿もあった。マラソンに例えるなら、40 kmを過ぎてからの最後の登り、箱根駅伝に例えるなら、往路5区の登りと言ったところか。しかも、マラソン選手は軽装備に対し、児童は背中に大きな荷物を背負う。給水所もないから、水筒持参である。低学年の児童が一気に登るのは、大変過酷なのである。

だから、大柳が最後に正門を通過するときは、桜階段でOさんのランドセルを支えてやることにした。他の団員からは、「Oだけずるい…」なんて声は上がらない。低学年の頃は苦労していたことを自身が経験し、ちゃんとわかっているのだ。

すると、かなりの段数と勾配のある桜階段で、Oさんはスピードが上がる。調子がいい時は他の団員を追い越していくことさえある。三重苦の一番の苦は、「ランドセルの重さ」だったのである。

現在、「ランドセルの中身」と「その対処法」について、学校で検討中である。学校に用具を置く「置き用具」が主な方策となろう。ここで大切なことがある。

児童の「自治意識の涵養(かんよう)」「自治意識の陶冶(とうや)」である。

何かを行うには、必ずリスクが伴う。置き用具ならば紛失だ。これを児童の自治によって防ぐことができるように、教師が仕向ける必要がある。

正義感育成の成果は、児童が大人になったとき、日本の力と姿を変えるのだ。